

---

# The house next door

靴下ちゃん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

The house next door

### 【Nコード】

N8778W

### 【作者名】

靴下ちゃん

### 【あらすじ】

五年も誰も住んでいなかった隣の家に突然、四大家族が引っ越してきた！？しかも隣の家の同い年の男の子の言われたのは、「はじめまして」のかわりに「お前の部屋はどこだ？」だった。

もう、あんな奴がまってらんない！！

ワガママ王子との隣どうし生活、海里ははたして無事でいられるのか・・・！？

## 隣

あいつがこの町に引っ越してきたのは確かあたしが中学二年生の夏休み。

ずっと誰も住んでいなかった隣の家に来るといふ情報を聞いたとき、驚きすぎてしばらく声がでなかった。

だって隣の家が建つてから、五年も入居希望者がいなかったのだ。驚くに決まっているだろう。

あたし、花田海里（女）は自分の部屋の窓から見える数台のトラックと何年も人が住んでいなかった隣の家ドアに次々と入っては出ていく引っ越し業者の人を見つめていた。

引っ越し業者の人はこの暑い中、汗をだらだらたらしながらせつせつと中へ荷物を運んで行く。

かわいそうだ。

これが海里の率直な感想だった。これからここに住むんならそういったら運べばいいじゃないかと海里は思う。

でも、そうはいかないのだ。だってこれが引っ越し屋さんの仕事だから。

海里は窓をピシヤリと下り、リビングへ向かった。

「ママ、お隣さんちあいさつ行くの？」

ソファに寝っころがっていた母に尋ねる。

「行くわよ〜」

いつも三回ぐらい名前を呼ばないと気付かない母が今日は意外にも即答だった。

「へえ〜」

その事に驚きつつも、海里は何も言わないで冷蔵庫からお茶をとரிだしラッパ飲みしていた。  
そしてそれを飲み終わるとまた階段をのぼろうと海里はリビングのドアを開ける。  
その時だった。

「海里も一緒に行く？」

母の口からふと出た言葉。海里は歩く足をとめて考えこむ動作をした。  
だが、もう答えは決まっているのだ。

「暑いからいーかない!」

そう言い残し海里は階段上へと消えていく。残された母はやれやれと首をかしげるのだった。

.....  
.....  
.....

季節はすぎ、あの息も吸えないようだった熱風ではなく、涼しい風が吹く秋になった。

衣替えまで、後一週間だ。

だが、誰もが涼しくなって喜ぶ中、一人大反対の奴がいた。

「寒い！」

そう朝食の席で海里は叫ぶなり足をバタバタさせる。

「うるせーっ！」

「何よ！」

目の前の弟を海里はにらむ。

弟、花田正輝は海里の一歳下の中学一年生だ。歳が近いせいか、毎日口げんかの繰り返しだ。

「食べてる時にケンカしない！」

キッチンから、母がやってくる。

「だってママ！正輝があたしの……」

「はいはい、いつものね。」

母のわかっているという態度に少し海里は頬を膨らませた。

「それより海里。あんた時間じゃないの？」

海里は時計をちらりと見る。

「……………行つてきます。」

何かやり返してやりたい気持ちを抑え海里は玄関へと向かった。ドアを開けると朝の冷たい風が海里の肌をかすめる。

「はつくしよい！」

十月にはいつてからいつもこんな感じだ。寒がり体質の海里は冬がとても嫌いだっただ。

……………来年が待ち遠しい

海里は歩き始める。学校まで十五分ぐらいだ。だが、最近きになつてつい立ち止まってしまふものがあつた。

### 隣の家。

今日も自分の家から十メートルと進んでいないのに隣の家の前でフリーズしてしまふ。

気になるのだ。家の中が。

何年も誰もいなかったこの家に明かりがともっている。それだけでも違和感がある。

だが、問題はそこではない。

……………まだ、だれとも会つたことないわ。

そう、もう引越してきて、約二カ月になるのに海里は隣の家に住

人を見た事がなかった。

母は引越した日あいさつに行ったから会っている。

正輝もこの前女の子がドアから出ていくのを見たらしい。

ついにはお父さんまで

「お父さん、この前隣の家の人と会ったぞ」

なんて言うから海里はよけい気になってしまう。

お母さん情報によると、隣の家は四大家族らしい。

父、母、妹か姉かはわからないが女の子、そしてもう一人いるらしいが、性別も年齢も不明だ。

「ふう……」

海里は大きなため息をついた。その時！

ガチャガチャ

「!!!!!!」

隣の家のドアから鍵をあける音がする。外へ出てくるようだ。

……え！まだ心の準備がああああ！

すると海里に遠慮なんてするわけもなくドアが開く。

……無理!!!!!!

後になってから何が無理だったんだろうと悩むことになるが、今はとにかく無理だった。

よし！全部ドアが開く前に……！！

海里はいちもくさんにその場から逃げだしていた。



## 視線

「あつ秋奈っ!!」

その声に秋奈と言われた少女は振り返る。

「どうしたの？」

「たっ たすけてっ!!」

「え？」

「あたし・・・っ!!」

「????」

「あっあたし・・・!!」

「????」

「あのね!!」

「????」

「あた」

ブチッ。

え？と言つ暇も海里にはなかった。目の前から、自分の親友が襲い掛かってくる。

あわてて体をひっこめようとするが、もう遅かった。

「早く言えやあああああ！！」

「すつすみません！！」

ゲシッ！

「痛いっ！！」

そのキックは海里の背中に直撃した。

「あんたが、もたもたしているからよ」

頭上から声が聞こえる。

ふん！秋奈ったら蹴ったくせに、偉そうにしちゃって！

海里は何か立とうとする。だが、何度も起き上がろうとするが痛

みで立てない。

うう………悔しい！

その後も何回挑戦しても海里は立てなかった。

もう十分ぐらい足と格闘しただろうか。  
少し、周りの人からの視線が痛い。

「……………ほら、つかまりなさい」

しばらくしてその声と共に差し出された手。海里は少しためらった  
がその手につかまり、やっとのことで起き上がった。

「ふん！自分でやった癖に！」  
海里は秋奈にむかって文句を言う。

「……………」

え？

「……………」

無視ですかああ!?

自分の隣を歩く秋奈から返事はなかった。

海里は少し恨めし気に睨むが、相手はまっすぐ前を見つめている。

「ところで」

「?????」

口を開いたかと思えば先ほどの事ではないらしい。

それどころか、あんな事忘れました。みたいな顔をしている。

ちえ、謝罪なしかよ。

すると秋奈はまるで自分の心を読んだかのように少し眉をしかめた  
が気にせず、しゃべり始めた。

「……………何があつたの?」

……………本題言つてなかつた!!!

そして海里は学校までの距離を、自分があつたできごとを夢中にな  
つて秋奈に話すのだった。

.....

「へ」

「ちょっとその反応なによー！」

「だって、それだけでしょ？」

「それだけけど……それだけじゃないっ！」

「他に何かあるの？」

「……」

そう言われると海里は、何も言えなくなる。

「なんで逃げ出すわけ？そこはドアから出てくるまで待って、見ればよかったでしょ」

「……心の準備が……」

「何それ、なさけなっ！」

「うっうっ・・・」

今更ながら、紹介しよう。さつきからあたしに暴力的なこの女の子は北園秋奈、同じ中学二年生だ。そして海里の親友でもある。幼稚園の頃から一緒だった秋奈には海里も遠慮がなく、向こうもそうで、さつきみたいに蹴られることも少くない。そして彼女は・・・みての通り、毒舌家でもあった。

「このへタレがっ!」

・・・これ慣れなんだろう。こんな事を毎日言われているので何を秋奈の口から聞いても、動じないでいられる自信がある。そんな自分が少し悲しい。でもこんな自分だから、自分と秋奈は仲良くできるのかもしれない。そう思うと、不思議とちょっとうれしかったりもする。

「ちょっと海里。何ニヤニヤしてんの。」

「え?してないよ」

「いや、してるから。」

ふう、と秋奈のついたため息は、突然鳴り響いたチャイムにまぎれ

て聞こえなかった。

「じゃあ、席戻るわ〜」

そう言つて海里は自分の席へ戻つていく。周りもどんどん着席し始めていた。

海里の席は一番廊下側のうしろから三番目だった。

なんと最悪なポジション！と思うかもしれないが、海里はちがう。なんと斜め上の席の道長くんはみごとに体がたくましいので海里はそのたくましい背中の後ろにかくれ、授業中などなるべく影を薄くし、当てられないようにしている。

グッジョブ道長！！

道長くんのおかげで、指される数も減つたので海里はホントに感謝しているのだ。

いい男道長！！

心の中で親指をたてながら、海里は朝学習を始めた。

え？朝学習？

知っているだろう。あのめんどくさい朝の勉強を！！

あたしの中学校、桜北中学校は朝、これを毎日やらされる。

まったく、これがなかったら日常生活の五十パーセント分のイライラが減る気がしてしょうがない。

今日の朝学習は………数学だった。

海里は唸り声をあげる。

そして一番最初の問題に取り掛かろうとしたとき………

「ねえ、海里」

「ん？」

うしろから手がのびてあたしの肩をとんとたたたく。

それは、うしろの席の真菜ちゃんだった。しかし声がひそひそ声だ。

「どうしたの真菜ちゃん？」

つられて海里もひそひそ声になる。

真菜ちゃんは、あのね。と言つとあたしの耳に顔を近づけてくる。あたしも顔を真菜ちゃんへかたむけた。

「みてるよっ 海里のことっ」

……誰が？

とすぐにでも聞き返したかったが、その必要はなくなる。真菜ちゃんの言つとおり海里はある人からの視線を感じてしまったからだ。

向井陸斗、この中学校のアイドルだ。確かに切れ長の目、できもの一つなく、さわつたらとまらなくなりそうな肌。全体的に整った顔立ちをしている彼は海里から見てもなかなかのイケ面だ。その上、身長も高く、細身だけど折れそうな感じではないところが、女子のハートを次々と奪っていく。先輩後輩構わず休み時間などに見に来るが、本人はまったくの無視。ずいぶん冷めた性格のよう



だ。

その彼の視線があたしをつきぬけるぐらいキツイ。

しかも向井陸斗は隣の席だ。

二学期に新しい席になったのだが、まだ一度もしゃべったことがない。ていうか怖くてしゃべれない。

海里は少し緊張してしまう。

……うう、結構精神的なダメージが……

だが、とうとう決心して海里は顔を向井陸斗のほうへむけた。その瞬間目が合い、ドキッとしたが海里は負けずにがんばる。

「あ、あの……」

「お前。」

「はいっ!」

「今日日直。」

「はいっ忘れてました!」

「……」

「……?」

すると向井陸斗はくるりと向きをかえ、もうこちらの事など見向きもしなかった。

え？

ええ？

それだけかよ……！！

視線（後書き）

秋奈ー！！

キツクは痛いだろー！！

海里が少しかわいそうです（笑）

お客さん(前書き)

すみません

運動会で忙しく、更新まったくしてませんでした。

今度からちゃんとやりまーす

お客さん

キーンコーンカーンコーン

と六時間目の終わりをつげるチャイムが鳴るのだが。  
日直のあたしは帰れない。

……ってか向井陸斗！

お前も隣の席なんだから日直だろーが！

だが、チャイムが鳴ると同時に彼は風のように教室から去っていったのだった。

「はあ。」

一人日誌を書きながらするため息は教室に響き、やけにむなしかった。

本当は今日の夕方、ドラマの再放送があったのだが時間はもうとくに過ぎている。

「はあああああ。」

ちよつと大げさにもう一回ため息をやってみただけどいつもみたいにくっ込んでくれる秋奈もいない。

「よし！帰る！」

明日とことん向井に文句を言おう！  
そこで次の日直の時は全部あいつにやっってもらおう！

日誌はまだ未完成だった。だが、海里は適当な事を書いて終わらせ、職員室に向かう。

ガラガラガラッ

「先生！」

「おお、花田、終わったか？」

「はいっ！ではこれで。」

普段は日誌の中まで先生が確認してやっと帰れるのだが……海里は先生に日誌を渡すとそそくさと職員室を出た。

「おい！待て花田！」

……海里が次の日怒られたのは言うまでもない……

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

「ただいま」

海里が、やっとの思いで帰ってきた頃にはもう、六時半を回っていた。

そして急いで自分の部屋に行こうと階段を登るとき……

「そう！そんなの！でね、お父さんが……」

………お母さんの、楽しそうにしゃべる声。

「あら、本当に！うちもそんなのよ！」

………誰ですか………！！

海里は急いで半分のぼった階段を引き返しリビングのドアを開ける。するとそこにいたのは………

「あら、おかえり海里。」

………すみません。家をまちがってしまったようです。

リビングにいたのは、あたしのお母さん……に似てる人。

そして見知らぬ三人。

一人は女の人。(きつとさつきしゃべってたのもこの人だろう。)

二人目はかわいらしい、まだきつと小学生の女の子。

三人目は…男なんだろうけど顔が見えない。

「この家の形が自分の家と似てたもので…ホントすみません。今出ていきます。」

海里は、今きた道を戻ろうとする。

すると…

「何言ってるの海里？はやくこっちにきなさい」

…やっぱりウチンちですよね!?

きつと誰かお客さんだろう。そう思い、海里はリビングへ足を踏み入れる。

それにしても…見た事のない人達だな。

海里は目の前まで来ると、ペコリと一礼して母に視線を送る。



「ああ、紹介がまだだったわね。こちらはお隣に引越してきた比良園さんよ」

ああ!!お隣さん!!……っていきなりいわれても、あたし心の準備とか!?え!っちょっと本当に!今日だって逃げ出しちゃったし、第一今制服だし、変な風に思われてるよね!?でも学校帰りなんだからしかたないし!!……ブツブツ。

「比良園莉実子です。よろしくね、海里ちゃん」

「えっ!……あ。……花田海里です……」

比良園さんのお家のお母さんが、自己紹介する。莉実子さんの笑顔はミスユニバースがとれそうなくらい美しかった。海里は自分のなんとも言えない自己紹介を情けなく思う。

「愛理です。小学六年生です!」

次はさっきのかわいらしい女の子だ。歳のわりにしっかりしていて海里の第一印象は「モテそう。」だった。

…するとやっぱり次は、あの顔の見えない男の子の順番なのだが、相変わらず顔はみえない。

……だってテレビ見てるから……。

「海斗!こっち向きなさい!」

莉実子さんが怒る。すると男の子はゆっくりと体をまげてこちらを向いた。

視線が合う。

その瞬間あたしの心臓は心肺停止していた。

## お客さん2

ゆっくりとうしろを振り向いた彼は………

超美男子でした。

初対面で失礼だとわかっていても、つい凝視してしまう。でも…

まっまぶしい！

海里には背景に薔薇が見えてしまっていた。

そしてずっとみてるのも恥ずかしいし、まぶしいし下を向いてしま  
う。

彼の黒くてやわらかそうな髪の毛は、長すぎず、短すぎず丁度いい。  
こちらを見つめる瞳の色は黒。異常なほど黒く、でもそれでいて輝  
きをはなっている。

しみ一つなく、白くてきれいな肌は首筋まで見えていてセクシーな  
イメージだ。

・・・まあ、全体的にイケメンなのだ。  
身長も低いわけではない。太ってるはずもなく、モデルできますよ  
っ！並みのスタイル。

いや、これでモデルやってないほうがおかしいんじゃないですか!？

海里がいろいろと思考を巡らせている間、彼がずっと海里を見ていた事を本人は知らない。

それどころかまるで彼の顔は「家政婦を見た!」のようになっていたことも。

海里は突然ハツとして顔をあげる。

…つつい妄想に入ってしまった!ずっと下向いてたし変におもわれてるかも…

そろそろと目線を彼に移す。するとやはり海里を見ていた。

…うわああ、

「花田海里です。よろしくお願いします。」

イケメンにあいさつってちょっと緊張する。  
するとイケメンは…

ペコリ

海里に一礼するとまた前を向いてしまった。

…え？

いくら見つめても自分の目先にいる男が振り返る様子はない。

…なんだよこいつっ！お辞儀だけかよっ！こっちはご丁寧に自己紹介までしてるのに！いくらイケメンだからって許される事と許されないことがあるんだぞ！ちょっとイケメンだからって！顔はイケメンでも大事なのは中なんだぞ！（やけにイケメンを主張している）

「ごめんね、海里ちゃん、海斗ってばもっつ！」

やり取りを聞いていた莉実子さんは申し訳ないとばかりにこちらを見つめてくる。海里もここは心配をかけまいと、「いいんです」と微笑みながら手を横にふった。

でも、本心は……

ふむふむ、莉実子さん。こいつは海斗って言うんですか。

「本当にごめんね海里ちゃん。いつもはもうちよつと愛想がいい子なんだけど……どうしちゃったのかしら？」

普段はもうちよつといい！？なんだこの男！あたしだけにこんなにつめたいの！？

「そうそう、海斗は海里ちゃんと同じ、中学二年生だからよろしくね」

…まじですか。

「海里ちゃんのいる中学校じゃないけど…すぐ近くの南大中学校にかよひ始めたの」

…莉実子さん、そこうちの中学校と部活やらなんやらで争ってる所ですよ…。

はあ、とため息が思わず口から漏れる。

だってだってせっかくのお隣さんなのに…！

こんな礼儀知らずの奴が…！！

もうっ！信じらんないっ！

ああ！これからあたしどうなるの…！？

……なーんて少女漫画みたいに言ってみたけど、現実はどうにも変わらない。

確かに失礼な奴だけど、仲良くやってかなきゃね。

きつとさつきは緊張して何にも話せなかったんだよ。

うん、絶対そう。

ふふふっあたしってなんかいい奴。

海里は一人でなぜか満足げに笑っていた。

さつきまで怒っていたのがまるで嘘のように。

「海斗くん、よろしくね。」

もう一度、今度はにっこり笑って愛想よくあいさつしてみる。  
もちろん名前を呼んで。

すると今度は…

ニコッ

極上スマイルっ!!

ほらね、やっぱり緊張してただけだよ!

…というか、それにしてもかっこいい。うちの中学校にきたら向井と同じぐらいの人気を取れるんじゃないかな?

「海里、制服のままよ。着替えてきなさい。」

いろいろと妄想中なのにお母さんが横から口をはさむ。

「…わかった。」

仕方なく、不機嫌そうに返事をしてリビングを出て行くとする。  
すると…

「海里!」

「何?」

お母さんに呼び止められる。

「今夜は……」

「……今夜は？」

「……鍋パーティーよ……!!」



お客さん2 (後書き)

お母さん!! ちょっと張り切ってる!! (笑)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8778w/>

---

The house next door

2011年10月21日10時01分発行